

山本妙先生のご退職によせて

吉田優子

初代コミュニカール編集委員会、すなわちコミュニカールの名付親委員会の委員長であった山本妙先生をお見送りする 때가来てしまった。言語文化教育研究センター時代から「たおやか」と山本先生のことを形容されているのを幾度となく耳にした。なんと優雅でびったりな形容だろう、と思ったもので、仕事をご一緒させていただくにつれ、漢字で書くと「嫺やか」、その旁とは真逆の「強さ」という魅力がよくわかってきた。

学校法人同志社の生え抜きでいらっしゃる山本妙先生は、同志社大学文学部英文学科ご卒業後、同大学院に進まれ、Virginia Woolf を中心に英文学のご研究に励まれた。在外研究期間には英国ヨーク大学へ一年間赴かれた。Bloomsbury Group で活動していた作家の研究を期にもう一つの研究の柱、ジェンダー研究に従事された。Woolf は 20 世紀前半の作家であり、彼女の兄弟は大学進学したのに対して女子であるがゆえにできず、ジェンダー不平等の中での活動を余儀なくされていた作家である。山本妙先生は 1990 年より同志社大学法学部に所属され、のちにその設置と同時に同大学言語文化教育研究センターに移籍され、教授昇進後、2011 年の開講と共に、グローバル・コミュニケーション学部へと移籍された。

言語文化教育研究センターでは教務主任をはじめ、多くの役職につかれた。グローバル・コミュニケーション学部では教務主任、全学共通教養教育センター主事、学部長代理、そしてコロナ禍となった 2020 年には学部長も務められた。大先輩の先生達からの信頼も厚く、愛される存在でおられ、後輩には憧れの存在であった。

名誉なことに、このように人望の厚い山本妙先生の送辞を書かせて頂くこ

『コミュニカール』11 (2022) 95-97

©2022 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

とになったのは、他でもなく私が同志社に入社してから26年間、あまりにもお世話になり続けたからだ、京都市人であることから始まり、何かとご縁が多かった。WoolfはGeorge Bernard Shawと親密であった。Shawの作品、Pygmalion（後にMy fair Ladyとして展開）でヒギンズ教授のモデルとなった音声学者、Henry Sweetが教鞭を取っていたことに強く惹かれてロンドン大学の大学院進学を決めた私だが、結果、London Groupの拠点、BloomsburyというWoolf縁の地で大学院時代を過ごしたことから不思議なご縁だったかもしれない。Woolf夫妻が住み、Hogarth Pressを設立したLondon南西部、Richmondに住んでいたときには、夫妻の名前が刻まれたブルー・プラークを横目にバス停へと向かっていた。そのプラークの写真をまだ妙先生に送れないでいる。

その実、様々な意味で私にはよき先輩であり、直接に、またその背中から色々なことを教わった。入社当初から私にはロール・モデルであり、決して追いつけないけれども少しでも近づこうとする目標のような存在であった。非常に懐の深い先生であり、ご自身がお若い頃から年下の同僚の指導をしてくださっていた。言文センター時代に教務主任をされていた時、教務委員として、ご指導いただいたときのこと。いつ、どれだけ休んでいらっしゃるのか、不思議になることしきり、いつも教務委員会の前夜の、午前1時か2時頃にA4用紙にして2枚ほどの長文メールが来て、委員たちはそれが気になりながらも翌朝、頑張って拝読し、議題にまつわる諸問題を消化しながら委員会に向かっていた。また、妙先生の人脈が豊かであったことも言文センター、グローバル・コミュニケーション学部どちらにおいてもその教育を充実させるために大きく貢献されている。

故Deborah Foreman-Takano先生とはお若い頃から親しくしておられたが、殊にTakano先生が体調を崩されたときには親身になってサポートされ、遺品整理は山本妙先生なしには不可能であった。Costcoの一区画が移動してきたようなTakano先生のパントリー、あくまでもたおやかに、手際よく作業をされていた。実に、校務においても「妙先生がご担当で、よかった！」と胸をなでおろす場面が幾度かあった。

学部の業務に非常にご多忙にされていながらも研究熱心で、多忙な時期に

でもしっかりと論文執筆に取り組んでおられた。コミュニカーレの2編のご投稿を含め、多数の論文を発表され、日本ヴァージニア・ウルフ協会会長を務められている。同時に教育にも熱心で、今から四半世紀前となるがCAIの授業もご担当、西納春雄先生とCALL教材を執筆なさるなど、先駆的に教育にもコンピュータを利用されていた。90年代に西納先生、田口哲也先生と出版された世界の英語を録音したオーディオ教材 *English to Englishes* はまだ Global English の概念も固まらない頃であり、こちらも先駆的な教材であった。また、ある年のお誕生日に大きな花束を抱えて講義から戻ってこられ、学生からの敬慕がうかがい知れる。

著名な学者であるお父様の影響は大きかったであろう、素敵なご一家を築いておられ、ご夫婦揃って学者であり、お二人とも音楽に精通され、ピアノにご堪能な妙先生はスタディ・アブロードの歓送会では同志社カレッジソングをさらりと、たおやかに京田辺チャペルのオルガンで演奏をされていた。お二人のお嬢様もそれぞれに才能を発揮しておられる。子育ても介護も熱心にされていたので、恐らく日々、5人分程の仕事をこなされていたであろう。

清水穰先生の命名、「タエ号」(妙先生の自家用車)で通勤されていた。帰宅の時間が合えば京都方面に帰宅する同僚を乗せて帰ってくださり、京田辺キャンパスからの道のりを仕事やイギリスのお話しをしながら帰宅するのはこの上なく楽しい時間であった。電車で来られることもあったが、その道中に『エセル・スマイス自伝集』の翻訳をされているときのこと、イギリス文化のこと、イギリス英語のこと、作家のこと、お話しできたことは私にとって非常に勉強になったものだ。

恩返しはできていない。これからできる恩返しができたらと思うが、何より私が先生にしていたように次にこのバトンを渡すことが一つの恩返しと思い始めて暫くなる。が、もちろん同じようにはできていない。

この先も頑張ろうと思います。コミュニカーレの母、山本妙先生、本当にお世話になりました。これからもご研究に、ご趣味に、豊かな毎日をお過ごしになられますよう、心からお祈りいたしております。